

(翻訳) 清川江以南地域における無文土器時代墳墓の出現について

裴 眞晟*

訳：平郡達哉**

The Emergence of Grave in south of the Ch`ongch` on River

Bae, Jin-Sung

(Translation : Tatsuya HIRAGORI)

キーワード：前期墳墓、清川江流域、埋葬習俗、石棺墓、出現

はじめに

支石墓に代表される無文土器時代の墳墓は他のどの考古資料よりも可視的である。したがって、考古学に興味がない人でも「コインドル（支石墓）」といえは先史時代の支配者の墓であると答えられるほど広く知られている。韓国考古学において支石墓をはじめとする墳墓については他の分野より多くの研究がなされてきた。その中で支石墓の起源と出現については韓半島考古学研究の草創期から言及されており、支石墓研究の歴史とともにあると言えるほど長期間にわたって議論されてきた問題である。

研究史の部分で言及するが、支石墓をはじめとする無文土器時代墳墓の起源地として中国東北地方、特に遼東地域を有力視する研究者が多い。墳墓出現の問題に関心を寄せる筆者もやはり心情的にはそのように考えるが、それを具体的に論証することが容易ではない

ことは、関連研究者であれば皆が感じる点でもある。支石墓研究の草創期から支石墓の起源に対する諸説が提起されてきたが、事実上の定説はなかった。1990年代以降の資料の増加にもかかわらず、墳墓の起源・系統問題はなかなか解決する兆しが見えず、最近ではこれに対する議論自体も急減しているようである。

しかし近年、韓国で古い時期の墳墓資料が以前とは比較できないほど増加しており、これらの資料を基に朝鮮民主主義人民共和国（以下、北朝鮮）の考古資料も含めて無文土器社会における墳墓の出現問題を解明してみたい。以下では、最近その輪郭を整理した韓半島南部地域の前期墳墓（裴 2011）とともに現在の北朝鮮地域と中国東北地域において、これと同時期であるか少し先行する事例も共に検討し、中国東北地域～北朝鮮～大韓民国（以下、韓国）という広域的な範囲での相違点と共通点を通して議論してみよう。

* 韓国国立釜山大学校考古学科
** 島根大学法文学部社会文化学科

1. 無文土器時代墳墓の起源に関する研究の現状

無文土器時代墳墓の起源に関しては、主に支石墓の起源について多くの研究がなされてきたが、大きく見ると特定地域を基点に全世界的に伝播したという説、韓半島自生説、中国東北地域の石棺墓を重視するいわゆる北方起源説、東南アジア伝来の南方起源説に分けられる¹⁾。

南方起源説は八幡一郎(八幡 1952)などによって提唱され、東南アジアの稲作文化とともに碁盤式支石墓が伝来したとした。続いて、都宥浩が韓半島の巨石文化は東南アジアに由来し黄海道地域に最初に伝わったとしたが(都 1959:1960)、卓子式を最も古い形態としたこと以外は八幡一郎と同じ主張であるといえる。さらに、これが北方的な石棺墓・積石墓と結合して変形支石墓(沈村里型)が発生したと主張した。つまり、都宥浩は北朝鮮地域の典型的な支石墓に分類した卓子式は東南アジア、変形支石墓に分類した沈村里型は自生したと考えたのである。一方、金秉模は支石墓と卵生神話の分布範囲を関連させて稲作とともに東南アジアから伝来したとした(金 1981)。しかし、農耕と関連させた南方起源説の影響力は微弱であり、近年ではほとんど言及されていない。

ヨーロッパや東南アジアの特定領域を起点として徐々に世界中に伝播していったという説は支石墓研究の初期の学説として見られたが1960年代以降にはほぼ姿を消し、南方起源説とともに現在では研究史上でのみ扱われる学説である。

そして、自生説は北方地域の石棺墓の影響を受けて韓半島で支石墓が発生したと考える点が骨子であるため、大きく見ると北方起源

説とも通じる。支石墓は石棺墓が巨大化したものであるという見解(梅原 1946)以来、三上次男は社会の階層化によって地下の石棺墓が地上化・巨大化したものを卓子式支石墓とし(三上 1961)、金元龍はシベリア伝統の石棺墓が韓半島西北部で支石墓に発展したとみた(金 1974:1986)。金貞姫も地上に上石(蓋石)のみあらわれたものが支石墓の初期型式であり、北方の石棺墓に由来したものとみた(金 1988)。

一方、支石墓の南方起源説では石棺墓は北方的要素であるため、南方的要素である支石墓と系統自体が異なるとされている(都 1959:1960、金 1981)。

いずれにせよ、南方起源説であれ自生説・北方起源説であれ、常に石棺墓に注意が向けられており、石棺墓には「北方」という言葉がついてまわった。しかしながら、石棺墓の起源については、シベリアミヌシンスクのカラスク青銅器文化の石棺墓が東進して内蒙古と中国東北地方、そして韓半島に影響を与えることになったという説(李 1976)以来、韓半島の石棺墓は北方シベリア系統として認識されてきた(金 1986)。李栄文が遼寧地域の石棺墓に注目したが(李 1993)、その後、石棺墓の系統に対する研究は進んでいない。

近年では韓半島南部地域における区画墓の起源について、中国東北地方に注目した見解が提示されており(安 2009)、周溝墓の起源については外部の影響より韓半島南部での階層化の進展に重きを置いた見解も示されている(金 2008)。

このように無文土器時代墳墓の起源といっても、その大部分が支石墓の起源を論じたものであった。卓子式・碁盤式・蓋石式間の前後関係も意見が分かれた状況でその祖型を見出すことが難しく、また、田村晃一も指摘し

たように起源の問題はどのような形態のものが最も古いのかを定めてから論じられなければならないが(田村 1990)、それを無視した側面も墳墓の起源論が安定してこなかった原因であった。墳墓自体の時期判定が難しい点もあり、上記のような論議があった当時、特に韓国では前期の墳墓資料が少なかったため資料的な限界も大きかった。

そこで以下では、韓半島南部(訳注：現在の大韓民国の領域)の前期墳墓を調べた後、この時期に対応する北朝鮮地域と中国東北地域の資料を比較・検討しながら墳墓出現の問題にアプローチしてみよう。

2. 無文土器時代前期の墳墓

(1) 韓半島南部の前期墳墓

韓半島南部における墳墓資料の圧倒的多数が後期に集中している状態ゆえに墳墓研究自体もその時期に偏らざるをえなくなったため、出現・起源の問題が未解決なのは当然なことかもしれない。しかし近年、韓半島南部で前期の墳墓資料が増加し、その特徴が少しずつ具体的に知られており、これを集成し全体的に考察した成果を簡潔に要約すると、以下の通りである。

韓半島南部の前期墳墓は土壙墓・石棺墓・支石墓・周溝墓に区分され³⁾、時期は前期後

半に属する⁴⁾。副葬品の有無によって時期判定が容易でない場合もあるが、近年の資料増加により遺跡の数は少なくとも30ヶ所あまりになる。後期のように群集せず、丘陵の頂上部と稜線部など眺望の良いところに立地し、木棺使用の可能性などはすでに幾人かの研究者によって把握されてきた特徴である。さらに、赤色磨研長頸壺に対する検討から前期後半でも土壙墓と石棺墓の出現時点が支石墓や周溝墓より古い可能性を提起できた。また、韓半島南部での分布を見ると(図1)、墓制の種類別による地域偏重現象などが見られず、副葬品において同一のセット関係を見せる点から、特定地域を起点に拡散したというよりは韓半島南部全域でほぼ同時に墳墓を築造する習俗が発生したと把握した(裴

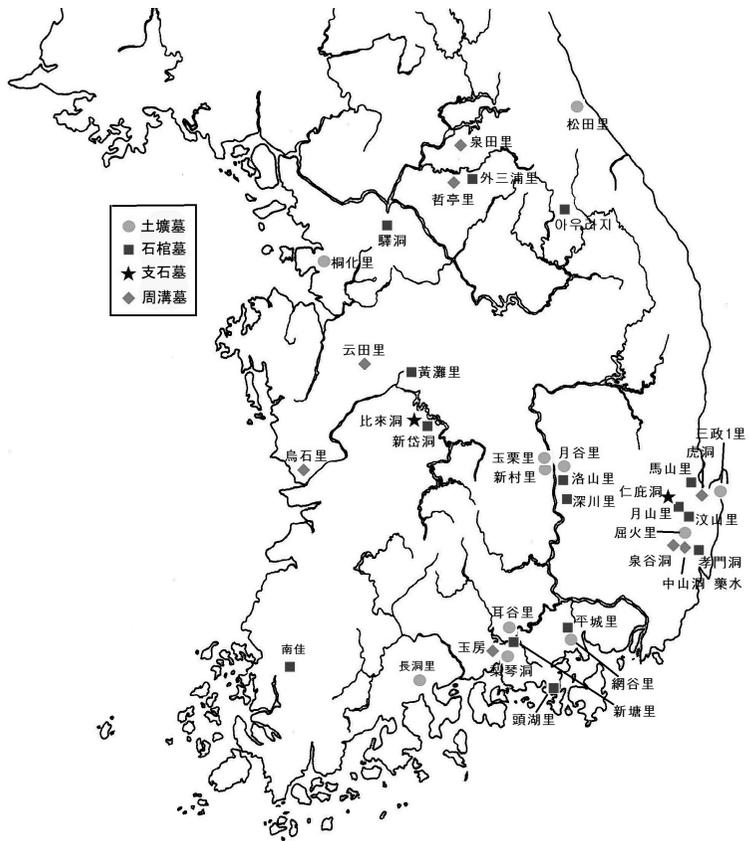


図1 韓半島南部地域における前期墳墓の分布 (裴 2011)²⁾

〈表 1〉 北朝鮮地域の前期墳墓

	遺跡	壁面	蓋石	床面	配置	立地	出土遺物	
石棺墓	平壤 南京 1 号	割石 (最下段残存)	?	板石、礫	単独	沖積地	有茎式石剣 1、石鏃、美松里型土器片	
	新坪 仙岩里	1 号	板石 (?)	板石 1 枚	板石	?	?	遼寧式銅剣 1、無茎式石鏃 1、二段茎式石鏃 3、管玉 2、人骨
		2 号	板石 (?)	?	割石	?	丘陵	無茎式石鏃 2、二段茎式石鏃 2
	白川 大雅里	板石	板石 1 枚	板石 1 枚	?	低丘陵	遼寧式銅剣 1、銅鏃 1、無茎式石鏃 1、二段茎式石鏃 9、管玉 1	
	鳳山 御水区	板石	?	?	?	丘陵	二段柄式石剣 1、石鏃 3、砥石 1、管玉 1	
	北倉 大坪里	1 号	板石	板石 1 枚	礫	群集	大同江 の三角 州	無茎鏃・二段茎式石鏃 5、玉 2
		4 号			板石 1 枚			美松里型土器片、有血溝有茎式石剣 1、無茎式石鏃 3、有茎式石鏃 4、管玉 2、人骨
8 号		礫、板石			有血溝有茎式石剣 1、二段茎式石鏃 8、人骨			
沈村里型 支石墓	沈村里キン洞 3～6 号	板石(地上式?)	上石、板石	礫、板石 両者混合	群集	丘陵	有茎式石剣、有茎式石鏃	
	五德里坪村 10 号	板石(地上式)	上石、板石	地山	?	沖積地	コマ形土器片、石鏃片、蛤刃石斧	

2011)⁵⁾。

前章の研究現状で見たように、既存の起源関連研究のほとんどが支石墓を対象としたものであったが、韓半島南部の前期墳墓の場合、支石墓より土壙墓および石棺墓が数も多く出現時点も古い。韓半島南部の前期墳墓に関する情報が近年になってようやく十分に把握できるようになったのであれば、墳墓の出現および起源に関する研究も再出発しなければならないだろう。

(2) 北朝鮮地域の前期墳墓

墳墓の構造および出土遺物から時期的に韓半島南部の前期墳墓に対応する北朝鮮地域の墳墓資料としては、北倉大坪里 1・4・8 号墓 (石 1973; 鄭 1974)、五德里坪村 10 号墓 (石 1974)、平壤南京 1 号墓 (金・石 1984)、鳳山御水区 (李 1959)・新坪仙岩里 (鄭 1983)・白川大雅里 (李 1983) 石棺墓、沈村里キン洞支石墓 (黄 1963) を挙げることができる。出土遺物は二段柄石剣、(有血溝)有茎式石剣、無茎式・二段茎式石鏃、曲玉、管玉、遼寧式銅剣、銅鏃、美松里型土器片などである。

上記のような北朝鮮地域の前期墳墓は構造と築造方法によって、石棺墓といわれる沈村里型支石墓に大別される。まず、石棺墓は割石で構築された壁石の最下段石のみ残った南京 1 号墓以外はその大部分が四壁の各面が全て一枚の板石からなる単板石式であり、仙岩里 1 号と大雅里石棺墓では蓋石も一枚の大きな板石からなっている (図 2)。床面には板石一枚あるいは礫を敷くこともあるが、板石を敷いてその上にさらに礫を敷いたり (大坪里 8 号)、反対に礫を敷いた後に板石を敷いたもの (南京 1 号、キン洞 3・4 号) は、韓半島南部の前期墳墓では見られない構造である。キン洞支石墓は埋葬主体部が石棺墓と類似していることから地上式と把握されたようである (図 3)。図面や報告文の記述のみでは 3～6 号がひとつの墓域の中に同時に築造されたのか接続しているのか、個別の区画が認められるのかなどを識別することは難しいが、韓半島南部で区画墓と呼ばれる範疇に含まれる可能性も排除できない。

次に、立地と配置を見ると南京遺跡の場合、第 2 地点では 1 号墓の 1 基のみ確認されており単独配置である可能性があるが (図 4)、

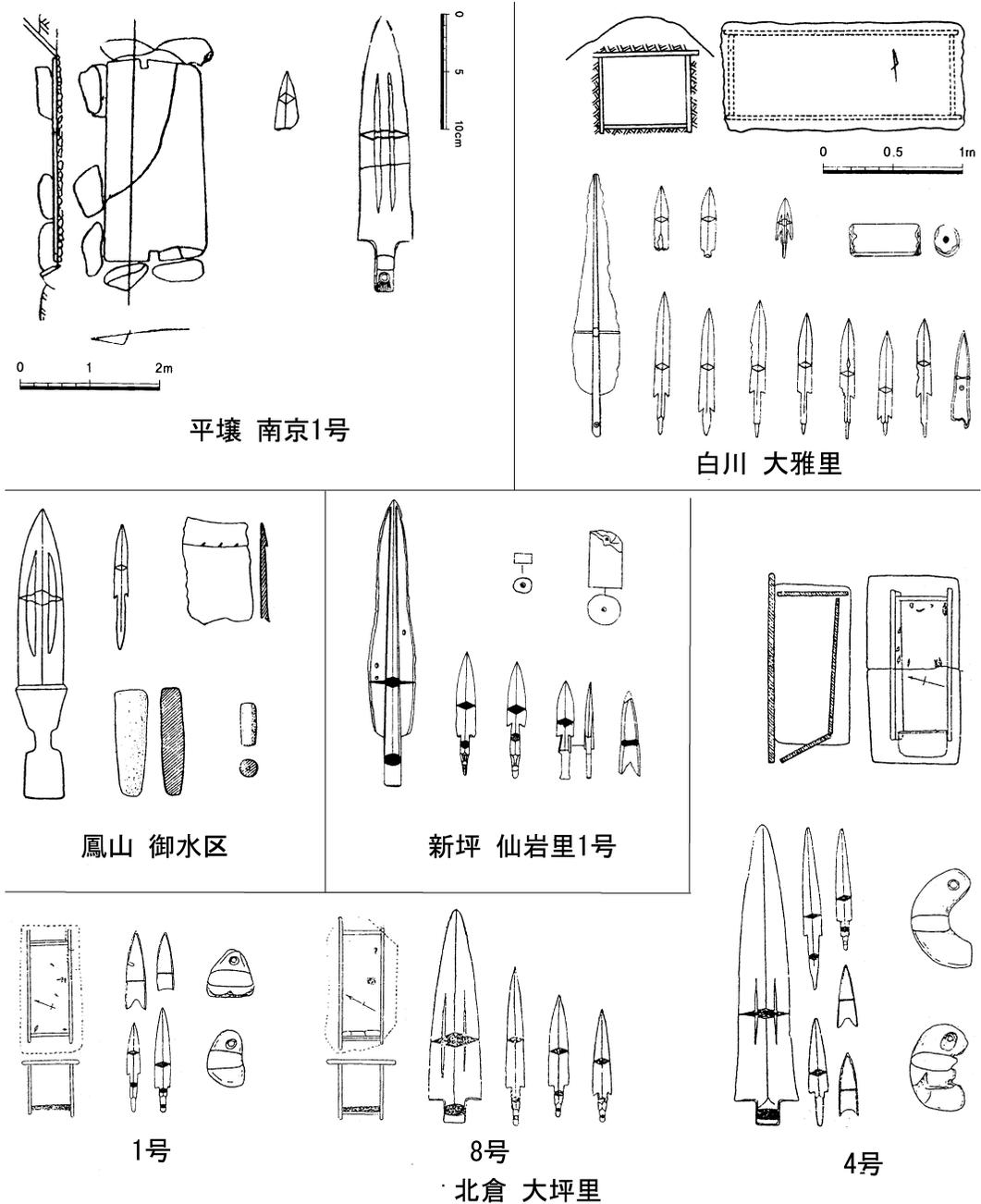


図2 北朝鮮地域の前期墳墓

その他に部分的調査あるいは収拾調査された遺跡については配置状態を把握することは難しい。北倉大坪里石棺墓の場合、遺物が出土しなかった墳墓は時期を知ることができないが、報告文に提示されている出土遺物から

少なくとも3基程度は前期と見ることができ群集する可能性がある(図4)。沈村里キン洞支石墓も群集する様相を見せる。したがって、配置は単独・混雑ともに存在する。立地は〈表1〉のように丘陵地と沖積地に該当し、

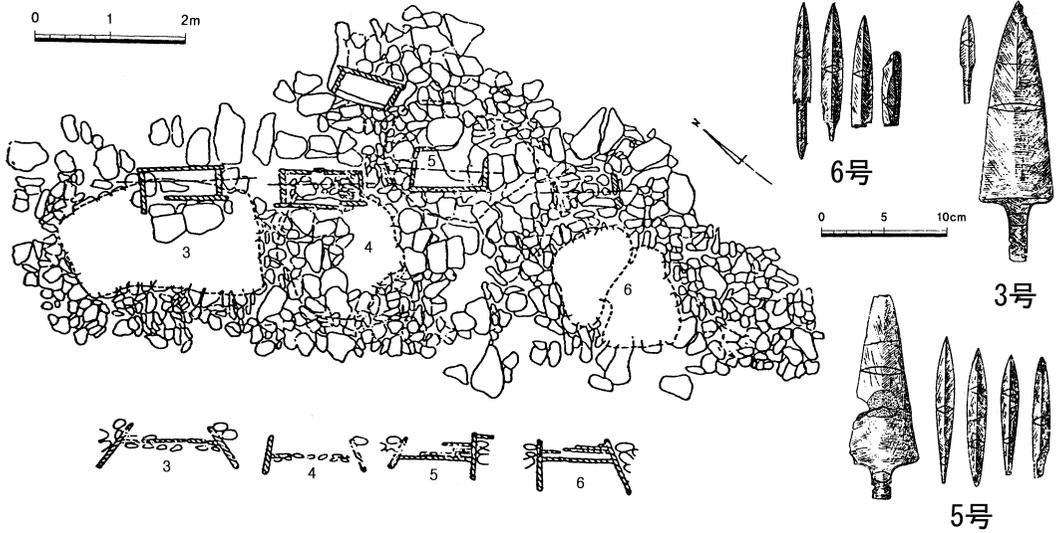
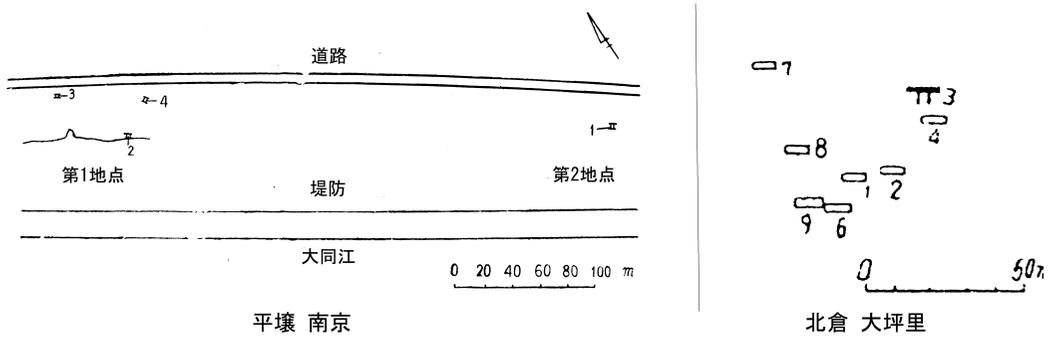


図3 沈村里キン洞支石墓



平壤 南京

北倉 大坪里

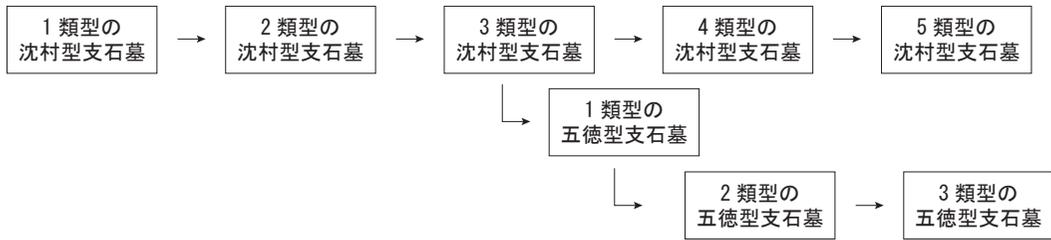
図4 平壤南京遺跡と北倉大坪里遺跡の墳墓配置図

石棺墓は丘陵に立地するケースが多い。

北朝鮮地域における支石墓の変遷については、沈村里型から五德里型への変遷を主張した石光濬の見解が代表的である(石 1979)。これは有光教一(有光 1969)と甲元眞之(甲元 1980)の案とも相通ずる側面があり、従来の南方式・北方式の区分とは異なる分類として、多様な支石墓の把握に有利であるという評価(田村 1990: 275)があるなど多くの支持を受けている見解である。石光濬は彼の支石墓の変遷案で最も古い第1類型である沈村里型支石墓の起源は石棺墓にあるとした⁶⁾。これは支石墓の埋葬主体部の構造的な

側面を石棺墓と関連させたものであるが、キン洞支石墓では血溝のない有茎式石剣と一段茎式石鎌が出土しており(図3)、前期かどうかを断言しにくい側面もある。これに対し、有血溝二段柄式石剣と無茎式・二段茎式石鎌が出土した仙岩里と大雅里石棺墓は韓半島南部の前期後半に併行することが明らかである(図2)。キン洞支石墓が前期であっても出現時点は仙岩里や大雅里石棺墓より新しい可能性が高い。そうであれば、北朝鮮地域でも韓半島南部地域と同様、前期のうちで石棺墓と支石墓の出現時点が異なる可能性もある。そして〈表1〉では出土遺物から時期を比定で

〈表2〉 北朝鮮地域の支石墓の変遷案 (石 1979)



きない大型の卓子式支石墓は含まれておらず、〈表2〉の石光濬の変遷案によれば卓子式(典型、五德里型)は前期墳墓には含まれなくなる。

3. 遼寧～吉林地域における西周～春秋早期の墳墓

次に中国東北地域の墳墓を見てみよう。まだ無文土器時代の各時期との年代比定が確立されておらず、ここでは詳しく論ずる余裕もないが、おおよそ西周～春秋早期に該当する紀元前11～8世紀初には韓半島南部の前期後半と相当部分併行するというので大きな異論はないだろう。本稿で当該時期の中国東北地域の墳墓を網羅することはできないが、遼西地域から吉林地域にいたる範囲の石槨墓・積石墓・支石墓・石棺墓のうち代表的な資料を中心にその特徴と副葬および埋葬習俗、出土遺物について調べることで韓半島との比較検討に備えたい。

(1) 遼西地域の石槨墓と遼東半島の積石墓

この時期における遼西地域の墳墓としては、いわゆる夏家店上層文化の寧城小黑石溝 M8501 号墓(赤峰市博物館ほか 1995: 内蒙古自治区文物考古研究所・寧城県遼中京博物館 2009)と南山根 M101 号墓(遼寧省昭烏達盟文物工作站ほか 1973)を代表的な事例として挙げることができる。この2基の墳墓は割石で築造された石槨墓と報告されてい

るが、小黑石溝 8501 号墓は残存長 3.1m、幅 2.3m、深さ 2.1m、南山根 101 号は長さ 3.8m、幅 1.8～2.2m、深さ 2.4m で、韓半島はもちろん中国東北地域の他の墳墓に比べて規模自体が大型である。内部から多量の副葬品と木棺の痕跡も認められたという。つまり、内棺として木棺がある石槨墓で「槨」にふさわしい規模と内容を備えている⁷⁾。また、各種の中原系青銅礼器、遼寧式銅剣をはじめとした青銅兵器、馬具、装身具、青銅工具、石器、土器など多種多量の副葬品が出土し、多くの研究者の注目を集めた。しかしながら、遼寧式銅剣以外の副葬遺物や遺構の規模と構造から韓半島の前期墳墓と直接関連づけることが難しく、遼東～吉林地域でも現時点でこれと対比できる材料はないようである。

そして、積石墓は遼東半島南端という限られた範囲に分布しており、比較的古い時期のものとしては商末～周初と把握されている于家村砦頭積石墓(旅順博物館・遼寧省博物館 1983)が代表的である。砦頭積石墓は多数の墓が接続するように築造され、すべて地上式であり、平面形態は方形・長方形・楕円形など多様である(図5)。内部からは老若男女を含む複数体の人骨が検出され、単室であるが多人葬の葬法を見せる。したがって、1つの墓に1家族が埋葬されたという見解や墓地全体が特定の氏族墓であると推定されることもある。副葬品としては壺・台付壺・把手付鉢・石珠・陶珠が出土している。これらの積

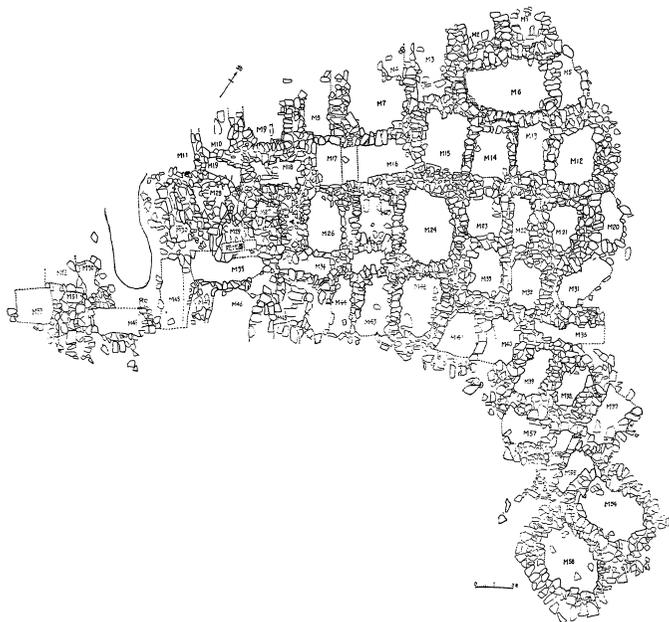


図5 千家村砗頭積石墓

石墓も構造、葬法、出土遺物から韓半島の前期墳墓の起源と関連させるほどの有力な手がかりを見出し難い。

(2) 遼東地域の支石墓—石棚・大石蓋墓—

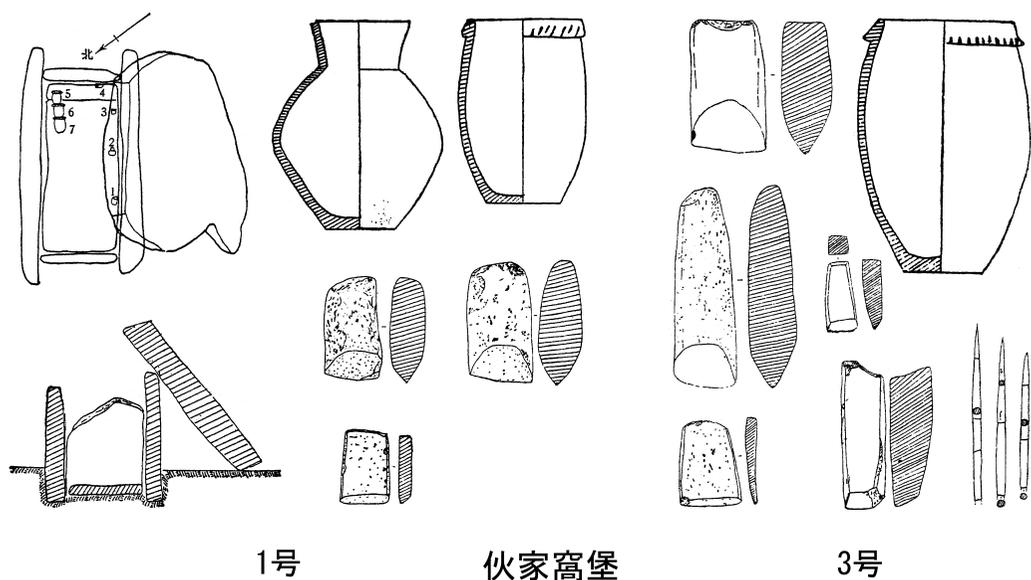
中国東北地域の支石墓は吉林地域にも一部分布するが、その大部分は遼東地域に限定される。卓子式支石墓である石棚は主に遼東半島に密集し、墓室上を覆う大型の板石を特徴とする⁸⁾。大石蓋墓は遼東半島はもちろん遼東内陸部にも多数分布する。このうち古い時期のものとして二重口縁(斜線文)土器・美松里型土器・遼寧式銅剣などが出土した蓋州伙家窩堡石棚(許1993)と普蘭店双房石棚および大石蓋墓(許・許1983)、縦耳把手付壺が出土した鳳城東山大石蓋墓(許・崔1990)などが代表的である。

中国の石棚研究をリードしてきた許玉林は大きさによって石棚を3種類に区分して「大石棚→中石棚→小石棚」の順に変化すると把

握し、あわせて「積石墓→石棚→大石蓋墓」へと変遷するとした(許1985:1994)。陳大為も「早期石棚(析木城)→変形石棚(石棚峪)→変形小石棚(白店子)→大石墓→崗上墓」へと変遷すると把握しており(陳1991)、石棚の変遷案は許玉林と変わらない。このように中国の研究者は遼東地域の石棚のみを対象として、大型石棚を最も古い時期の支石墓と見ている。一方、石光濬(石1979)・甲元眞之(甲元1982)・田村晃一(田村1996)・宮本一夫(宮本1997)たちは、遼東の石棚と韓半島の卓子式支石墓を共に論じながら両者は系

統を同じくし、規模が小さいものを古い時期、大きなものを新しい時期に編年した。これは墳墓自体の発達過程や築造技術的な側面でも小さく粗雑なものから壮大で精巧なものへと発展していく方向が正しいと判断され、韓半島南部の場合も(超)大型の上石がある支石墓は大部分が後期後半に属する。つまり、韓半島の卓子式支石墓と変わらない遼東の石棚もやはり小石棚から大石棚へと変遷した可能性が高く、これはすでに幾人かの研究者が論じたように小石棚から二重口縁(斜線文)土器と典型的美松里型土器が出土している点からも裏付けられる。

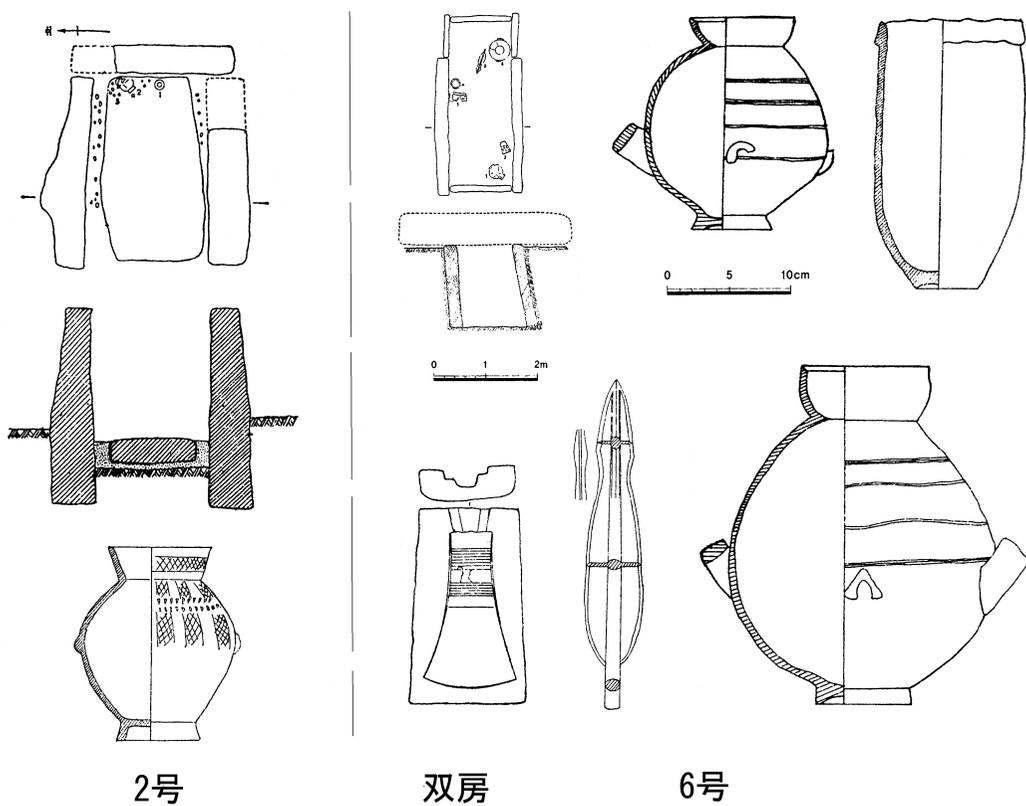
このような小石棚を含む卓子式支石墓の起源について、石光濬は沈村里型から(石1979)、中村大介は遼東半島の積石墓(中村2008)から求めている。大石蓋墓の起源として遼東半島の積石墓も挙論されたが(王嗣洲1998)、石棚から求める見解(許玉林1985)が多い。双房遺跡の場合、6号大石蓋墓出土



1号

伙家窩堡

3号



2号

双房

6号

図6 伙家窩堡石柵と双房石柵および大石蓋墓

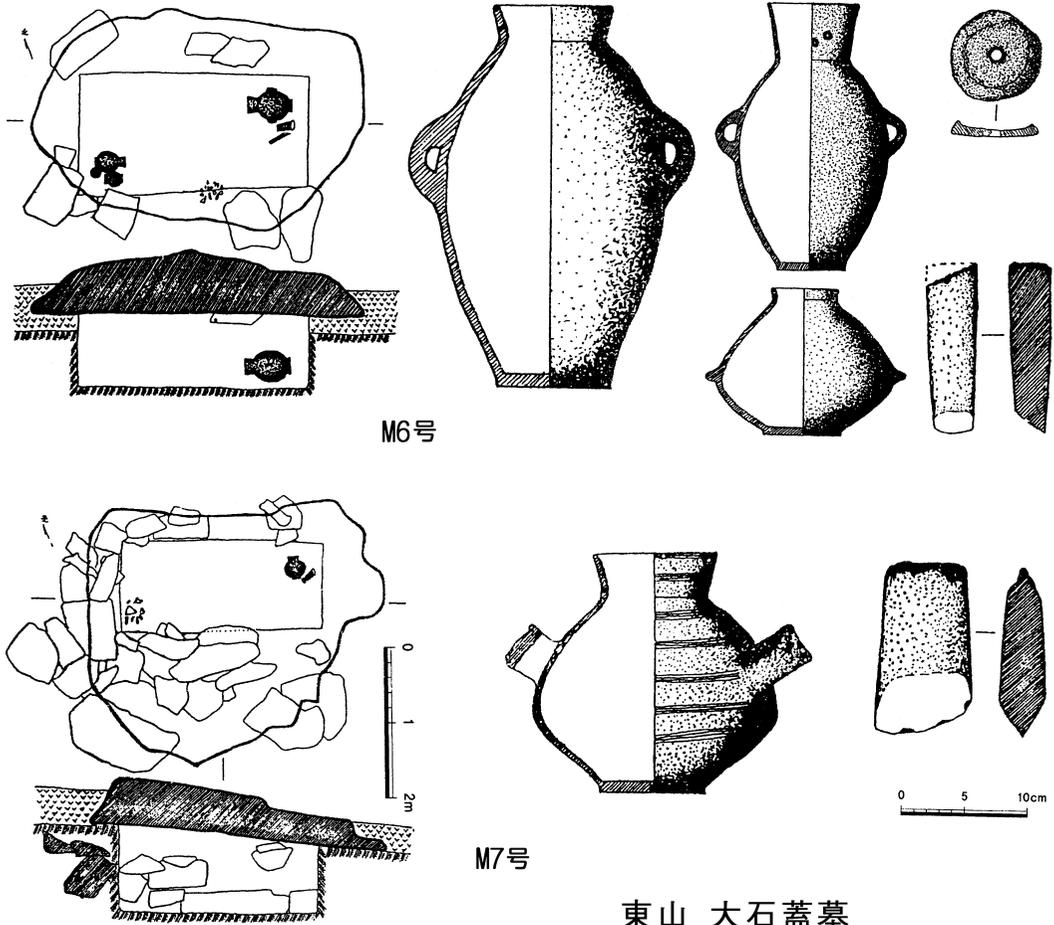


図7 東山大石蓋墓

土器より2号小石棚出土土器が古い(図6)、鳳城東山大石蓋墓は双房に先立つ馬城子文化に属する(図7)。

韓半島の前期墳墓の出現問題を論じるうえで中国東北地域における支石墓の影響の有無を検討するため、上記した古い時期の小石棚と大石蓋墓の特徴を見ると以下の通りである。遼東地域における双砵子Ⅲ期～上馬石上層期の小石棚は群集し、いくつかの事例で火を受けた人骨が出土しており火葬人骨と報告されている。出土遺物では上記した土器と共に石鏃、半月形石刀(訳注:石包丁)、紡錘車をはじめ扁平片刃石斧と蛤刃石斧などの

石器類が主要な副葬品として組み合わされる(図6)。東山大石蓋墓でも火葬人骨は一般的であるが、墓室構造は壁石を持つもの、墓壙からなるもの、墓壙の一部にのみ壁石を設置したものなど多様である。そして、副葬品に青銅器をはじめとして剣と鏃が副葬されていない点は上記の石棚とは異なる⁹⁾。次章で言及するが、これら遼東地域における古い時期の支石墓の特徴は、韓半島の前期墳墓の特徴と対比すると関連付け難い要素も多い。

(3) 遼寧～吉林地域の石棺墓

中原とは異なり、中国の東北地域は石棺墓

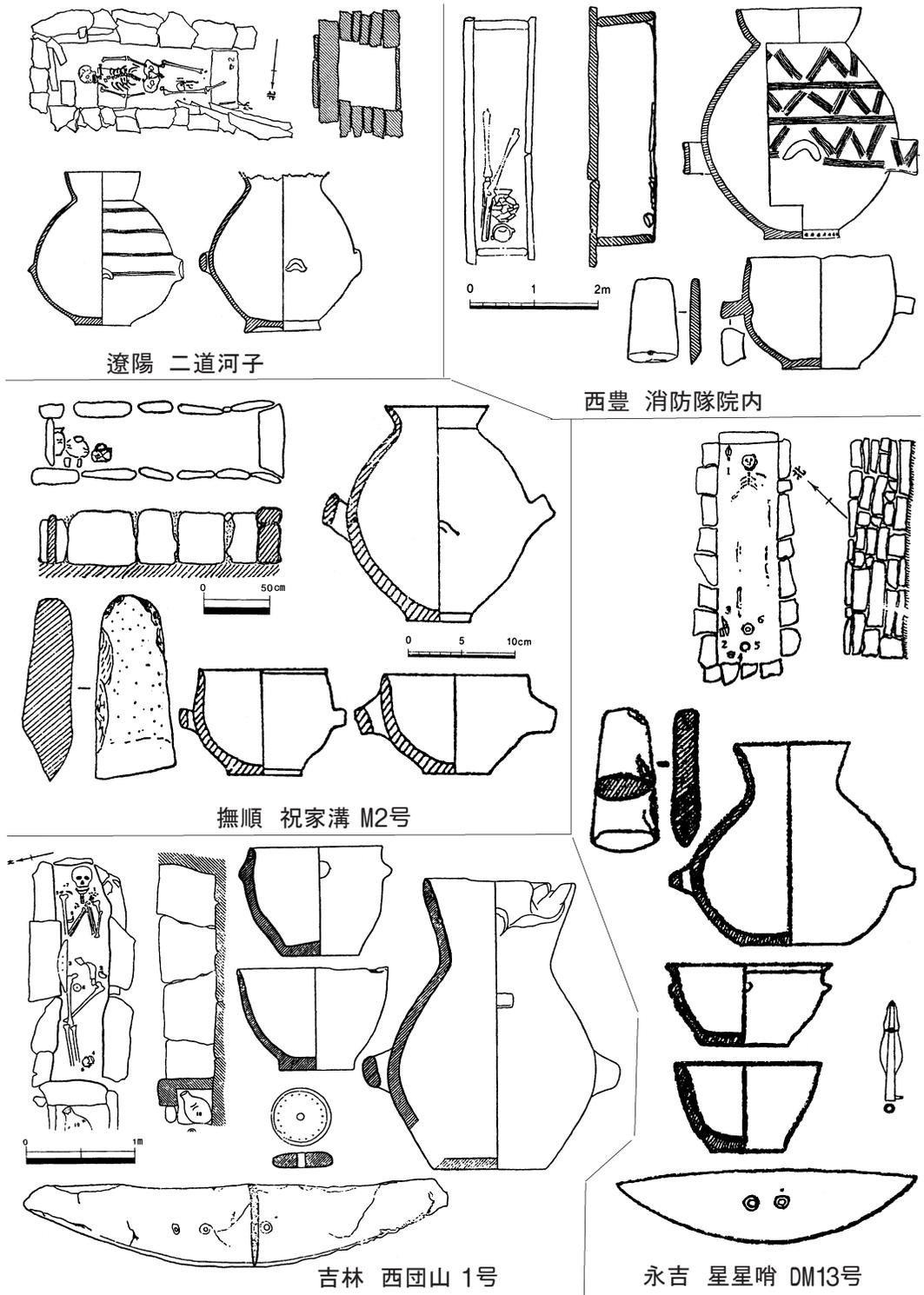


図8 遼寧～吉林地域の石棺墓

を築造する伝統が強く、支石墓や積石墓より分布範囲もはるかに広い。ここでは遼寧～吉林地域に存在する石棺墓遺跡全体を集成することはできないが、西周～春秋早期に対応する代表的な事例として、遼東地域の撫順大伙房水庫（佟・張 1989）、西豊県消防隊院内（遼寧省西豊県文物管理所 1995）、遼陽二道河子（遼陽市文物管理所 1977）をはじめ、西団山文化でも古い時期に該当する吉林地域の西団山（東北考古発掘団 1964）と星星哨（吉林市文物管理委員会・永吉県星星哨水庫管理处 1978、吉林市博物館・永吉県文化館 1983）石棺墓などからその特徴を調べてみよう。

遼東地域の石棺墓は各壁面を 1 枚の大型板石で構築した単板石式、複数枚の板石を横に繋いだもの、立てて繋いだもの、板石や割石を寝かせ、複数段積み上げたものなど多様な築造方式を見せる（図 8）。床石は無いものが多い。大部分が単人葬であるが、二道河子石棺墓のように成人と乳幼児が一緒に埋葬されることもある。主要な副葬品には遼寧式銅劍・美松里型土器・片刃石斧などがある。

西団山文化の石棺墓では単板石式は少なく、板石複数枚を立てて繋いだものと板石や割石を寝かせ複数段積み上げたものに区別される（図 8）。遼東地域もそうであるように遺跡内で群集配置しており、韓半島南部のように単独または 2 基並列配置は少ない。出土遺物は西団山文化の標識土器である把手付長頸壺をはじめ半月形石刀・紡錘車・遼寧式銅劍・銅矛・片刃石斧である。

一方、馬城子文化でも双砬子Ⅲ期に並行する本溪廟後山洞窟墓には石棺墓もあるが土壙墓も多く¹⁰⁾、火葬・仰身葬・二次葬の 3 つの葬法が確認される（遼寧省博物館ほか 1985）。

4. 清川江以南地域における墳墓の出現

(1) 遼東地域と無文土器社会

起源と関連した従来の議論では、その大部分が巨大な上石を持つ新しい時期の支石墓が主な対象資料としていた。しかし、韓半島南部の前期墳墓は石棺墓と土壙墓が多く、支石墓より出現時点も古い。長く議論されてきた支石墓の起源についても明確な解答はないが、それより石棺墓などの出現が古ければ起源および出現の問題はより難しく複雑になるかもしれない。

上述したように、中国東北地域の墳墓は韓半島より種類も多く、同じ種類であっても築造方法や副葬品の組み合わせ様相が多様であり、同じ地域圏でも墳墓の様相は一律ではない。このように中国東北地域全体であれ、その中の一定地域圏であれ、韓半島との共通点よりは相違点が多いように感じられる。このような状況で韓半島南部の前期墳墓の型式を分けて、その中の特定型式を中国東北地域のある型式と比較してそこから起源しているとか、韓半島内の特定地域に特定型式の墳墓が出現して拡散したというふうに把握することは難しくないだろうか¹¹⁾。また、いずれか特定の要素のみを重視して、韓半島墳墓の起源と出現を論じることが説得力がないだろう。

墓に石を使用する文化は世界的に見られるとともに多様であるため、遠く離れた地域に起源を求めるよりは無文土器社会との関連性を検討するべきである。特定型式の比較を通じた墳墓の起源・系統の把握が難しいとしても、前期後半の韓半島南部全域に拡散する墳墓築造の開始には新たな文化の影響を考えざるを得ず、その際に注目されるのは北朝鮮地域～中国東北地域である。北東アジア内の大

きな地域圏はもちろん、地域圏内でも展開様相の違いや地域色は考慮されるべきだろうが、支石墓や石棺墓の分布から中国東北地域～北朝鮮地域～韓半島南部を貫く共通の要素や観念は存在しないだろうか。先の研究史で調べた複数の見解もこれに対する認識が根底にあったと考えられ、近年、無文土器の系統論でも遼東～韓半島西北地域が注目されている(裴 2010b)。

(2) 多様な石棺墓

中国東北地域に石棺墓が広く分布しており、支石墓の起源を石棺墓から求める見解が多かった。韓半島南部でも石棺墓の出現時点が支石墓より古く、〈表1〉のように北朝鮮地域の前期墳墓も石棺墓が圧倒的であり¹²⁾、沈村里型の起源も石棺墓にあるという(石 1979)。つまり、無文土器時代墳墓の起源と出現の問題は、韓半島における石棺墓の出現をどのように把握するかにかかっているといえるだろう。しかし、韓半島の石棺墓の起源については「北方系」という表現で言及されてきただけで具体的な研究は実質的に行われていない。ここでは北東アジアの石棺墓全体を詳細に比較検討できないが、前述した韓半島南部、北朝鮮地域、中国東北地域の石棺墓の特徴を対比しながら韓半島無文土器時代における墳墓の出現問題にアプローチしてみ

よう。

前章で見たように遼東～吉林地域の石棺墓は壁面を構築する方式が多様であるのに対し、北朝鮮地域の石棺墓はその大部分が単板石式である。一方、韓半島南部では単板石式は少なく割石で構築する事例が多い。床面の構築方法も北朝鮮地域では板石を敷いて、その上に再び礫を敷いたり、その逆の場合もあったが、これは東北アジア石棺墓の中で北朝鮮地域でのみ確認される様相ではないかと考える。遺跡内での配置様相も韓半島南部の場合は主に単独あるいは2基並列配置された後、後期になると群集をなす一方、中国東北地域の石棺墓は言うまでもなく積石墓・石棚¹³⁾・大石蓋墓でも複数基が群をなす(図5・9)。北朝鮮地域の場合、南京1号墓は単独築造の可能性があるが、大坪里は群をなし(図4)、大雅里と仙岩里は実状が不明である。したがって、石棺墓といっても構造と築造方法や遺跡内での分布様相において三つの地域が異なる。

無文土器社会における墳墓の出現の問題は、韓半島内の独自の要因のみでは説明しがたい。刻目突帯文土器の出現、遼寧式銅剣の副葬、支石墓の分布圏、農耕社会の成立、東北アジア先史文化の流れなどを考えると、墳墓の出現もやはり遼東地域の影響力を考慮せざるを得ないだろう。北朝鮮地域と韓半島



図9 中国東北地域における主要遺跡での墳墓配置

南部とも遼東地域の石棺墓の影響を受けたとしても、上述したように墳墓の築造方法や配置様相において共通点よりは相違点がより明確に表出している。そのような原因として2つの可能性を考えてみると、まず一つ目として遼東地域から互いに異なる形態の石棺墓を

それぞれ受容した結果である可能性、2つ目として特定の石棺墓ではなく、石棺墓という墳墓を築造する習俗や文化自体を受容し、地域に合わせて適用させた可能性を提起できよう。ここでは副葬品を含む副葬習俗を通して後者の方に重きを置いた。

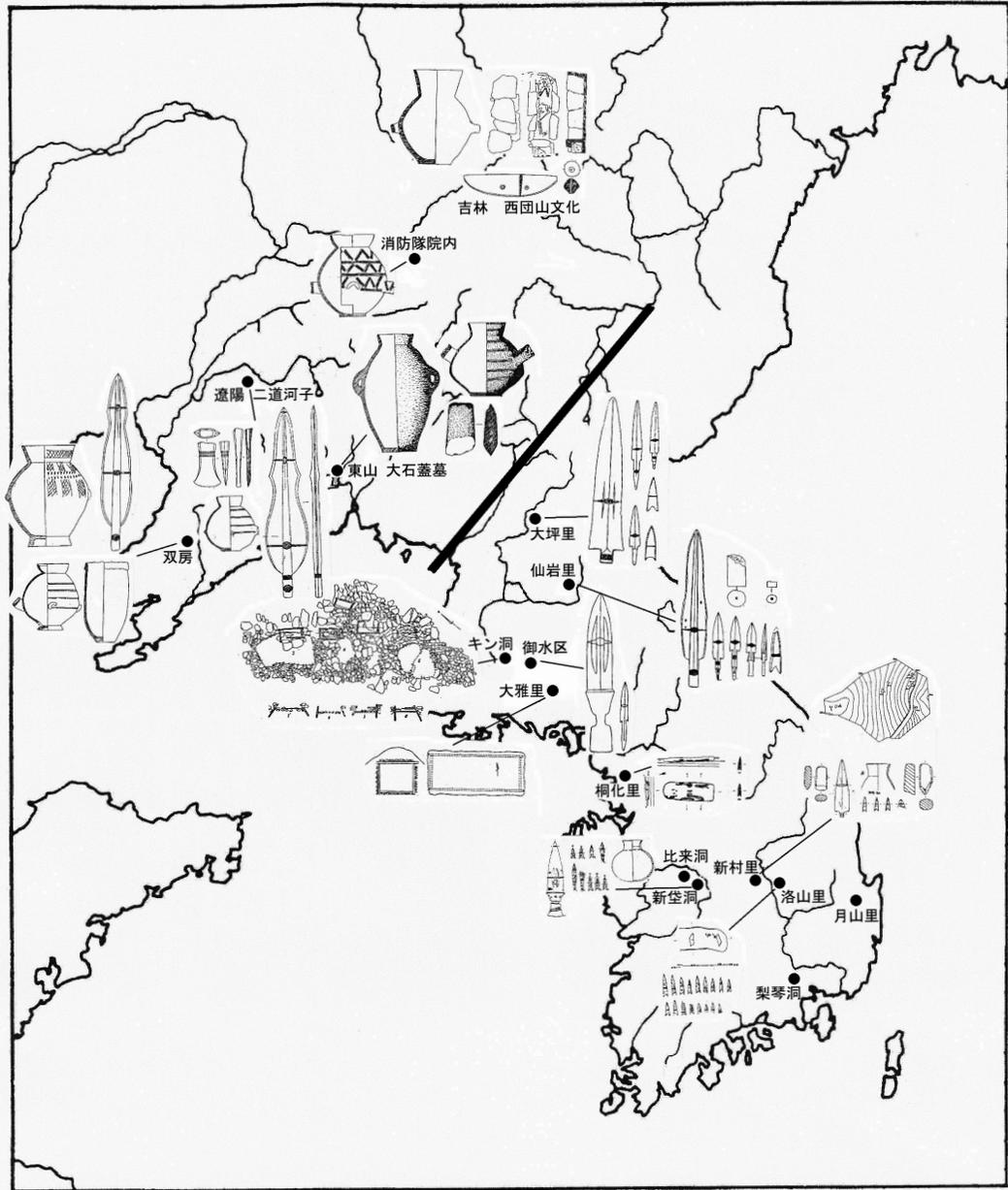


図 10 清川江流域を境界とした副葬習俗の区分

(3) 清川江流域を境界にした副葬習俗の区分

中国東北地域から韓半島南部に至るまで遼寧式銅劍の副葬は共通するが、副葬品のセット関係は遼西、遼東、吉林、韓半島でそれぞれ異なっている。中原系青銅礼器など膨大な量の副葬品を誇る遼西地域の小黑石溝 8501 号墓と南山根 101 号墓と遼西～吉林地域における墳墓の副葬品の違いはもちろんのこと、遼東地域と西団山文化における石棺墓の副葬品セットにも違いがある。遼東地域の石棺墓・石棚・大石蓋墓では銅劍・銅矛・銅斧・複数器種の土器・紡錘車・各種石斧などがセットをなすが、時期や地域による違いも見られる¹⁴⁾。

その一方、劍・鏃・土器を主とした韓半島における前期墳墓の副葬品の組み合わせは、韓半島南部と北朝鮮地域とも共通性を示す。土器の種類は地域によって異なるが、石劍と石鏃を筆頭とした副葬習俗は清川江以南地域で共通する点に注目したい。無文土器社会において清川江流域を中国東北地域と朝鮮半島の境界地帯に設定する考えは、時期は新しくなるものの鴨緑江上流域の江界豊龍洞石棺墓に対する検討を通して明らかにした(裴眞晟 2010a)。鴨緑江流域は副葬遺物では中国東北地域の特徴を見せるが石棺墓の構造は単板石式であるため、両地域の特徴が混在しており、典型的な美松里型土器も清川江流域が南限であ

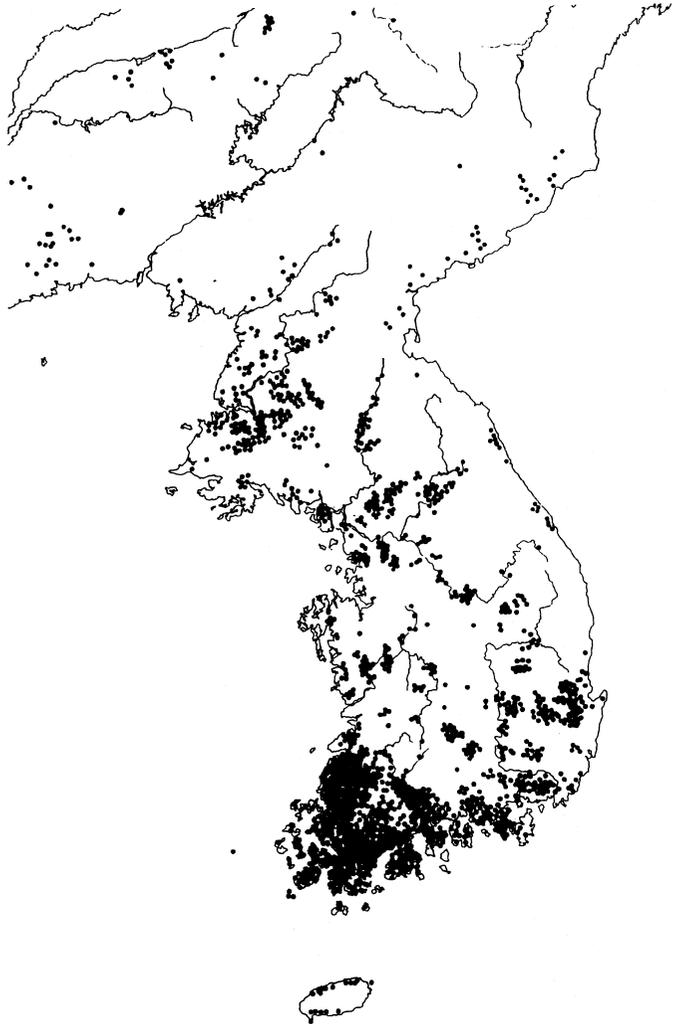


図 11 韓半島における支石墓の分布 (甲元 1997 より)

る。鴨緑江流域を両地域の特徴が共存する漸移地帯のような性格を有する地域と見做すことができれば、清川江流域を境界にしてその以北地域と区別されるのである。つまり、東北アジア各地域の石棺墓は様々な副葬品の組み合わせを見せているが、無文土器時代前期の墳墓では清川江流域を境界にして中国東北地域と区分される習俗が表出すると判断される(図 10)。あわせて鴨緑江流域と清川江流域の間の地域は遼東～吉林地域よりも支石墓の数が少なく、北東アジア支石墓の分布

(図 11) において一種の空白地帯のようにも見える。ここを境にしてその南側から支石墓の分布密度が高くなる様相も清川江流域を境界と見る根拠になる。

一定地域における同じ副葬品の組み合わせの存在は副葬習俗、さらに墳墓に対する観念的な側面の共通性を意味するだろう。前述したように遼東地域の墳墓で火を受けた人骨が出土しており、火葬と報告された事例がかなり多く見られる。ところで近年、韓半島南部の華城桐化里(畿湖文化財研究院 2008) 1号墓から少量の人骨片と共に幅 10 cm前後の木炭が良好な状態で検出され、広州馱洞石棺墓でも少量の木炭と被熱痕のある石材が確認された(朴 2010)。遼東地域と共に韓半島南部で確認されたこれらの事例は、たとえ墳墓の型式・構造・配置・副葬品セットの様相が異なるが、類似する習俗の存在を示唆する可能性も排除できない¹⁵⁾。

したがって、中国東北地域の影響による無文土器時代墳墓の出現は、特定墳墓の採用ではなく、墳墓を築造する習俗自体の受容であった。その結果、清川江流域を境にその以南地域に墳墓や埋葬に対する共通の習俗および観念が形成された。これに基づいて当時の東北アジアにおいて清川江流域を境界にして、その以南地域を一つの圏域として括って検討することができる。

おわりに

以上で韓半島南部と北朝鮮地域における無文土器時代の古い時期の墳墓と西周～春秋早期に該当する中国東北地域各地の代表的な墳墓資料を比較検討してみた。これにより墳墓の形態や構造および遺跡内での分布様相からは、無文土器社会における墳墓の起源・出現を中国東北地域と直接連結させることが容易

でないことが分かった。したがって、従来の研究とは角度を変えて副葬習俗の区分に注目した。その結果、無文土器社会における墳墓の出現は中国東北地域から特定型式の墳墓が伝播し、これが韓半島全体に拡散したというよりは、墳墓を築造する習俗の影響と判断した。さらに、韓半島内でも地域的な違いはあるだろうが大きく見ると、無文土器社会で墳墓築造が開始した当時、清川江以南地域は墳墓や埋葬に対する共通の観念が作用していたと推論した。

墳墓の形態と構造を通じた精密な型式の分類、各種副葬遺物の型式の比較を通して、個々の型式ごとの起源と伝来ルートを明らかにし、その原因と結果まで論じなければならぬだろうが、現時点では筆者の限界を実感するのみである。今後、東北アジア青銅器時代¹⁶⁾における古い時期の墳墓に対する詳細な研究が進むことを期待したい。

*本論文は 2011 年の釜山大学校人文社会研究基金の支援を受けて研究された。

本稿は 2011 年 10 月に開催された第 5 回韓国青銅器学会学術大会の発表要旨文を基に完成させた。

註

- (1) 支石墓の起源と発生については、田村晃一(田村 1990)と李榮文(李 1993)が当時までの成果を整理している。
- (2) 前稿(裴 2011)の分布図に羅州長洞里、順天南佳遺跡を追加した。
- (3) ただし、時期比定が困難な卓子式支石墓は除いている。
- (4) 前稿(裴 2011)の新「中期」であるが、ここでは既存の時期区分に従う。
- (5) 前稿(裴 2011)にある韓半島南部地域における前期墳墓の図面資料は、ここで

- 逐一再度収録していない。
- (6) 沈村里第1類型の埋葬主体部が石棺墓と類似しており、これに加え北倉大坪里石棺墓も当時は地上に築造されており、本来はそれを覆った封墳があったと推定した後、封墳の流失のために蓋石を大きく重く作る必要から沈村里型支石墓のような構造があらわれると考えた。また、蓋石の上に上石が確認された延安長谷里墳墓は石棺墓から支石墓に移る過渡的な姿を示す事例と判断した。つまり、その見解は支石墓の韓半島自生説に該当するといえ、具体的に西北地域の支石墓は石棺墓から独自に発展したと見た。
 - (7) 韓国では規模や「槨」の概念を考慮せず、板石でなく割石で壁面が構築されている場合に「石槨墓」と呼ぶこともある。中国東北地域では、壁面の構築状態と材料の違いで「石棺」と「石槨」を区別しないようであり、北朝鮮地域も同様である。韓半島の前期墳墓の中に「槨」にふさわしい墳墓はないようである。
 - (8) 東山大石蓋墓の場合、墓室として石棺はもちろん土壙もあり、墓室の上に大石蓋を支える支石があるものと無いもの両方がある。
 - (9) また、壺の把手の表面に布目状圧痕を観察して、この遺跡に特殊なものと把握されることもある (大貫 1995)。
 - (10) 李鍾洙は遼北地域および遼東半島を含む遼南地域はもちろん吉林地域の西団山文化の石棺墓も馬城子文化の影響と見た (李 2009)。
 - (11) 今後、東北アジア各地域の墳墓研究が詳細に行われ、地域別の変遷様相が明らかになるとしても、特定型式間の比較のみで起源の問題は解決されないだろう。
 - (12) 土壙墓も該当するが、現時点では北朝鮮地域の前期の土壙墓は不明である。
 - (13) 古い時期の小石槨は群をなし、新しい時期に築造された大石槨は単独築造を特徴とする。
 - (14) 支石墓が分布する範囲は、鼎や甬がない土器様式の分布範囲と一致する (宮本 1997) など遼東地域内でも区分され、双房および二道河子より古い砬頭積石墓や廟后山遺跡の副葬遺物もこれらとは区分される。
 - (15) 一方、南部地域の金泉新村里1・2号墓では蛤刃石斧が共伴する点が特異である。北朝鮮地域における前期墳墓の埋葬主体部内からは出土事例がないのに対し、遼東地域の大伏房水庫石棺墓、伙家窩堡1・3号石槨、東山大石蓋墓遺跡で蛤刃石斧が副葬されており、扁平片刃石斧まで含めると遼東～吉林地域一帯で石斧の副葬は一般的であるといえる。韓半島南部地域の前期後半でも古い時期に該当する土壙墓で蛤刃石斧が出土していることは遼東地域の影響が反映されたのであろうか。類例の増加を見守る必要がある。
 - (16) 時代名に対する筆者の立場は前稿 (裴 2011) と変わらない。本稿で「青銅器時代」は東北アジア全体を対象としたときの時代の名称であり、「無文土器時代」はその中で韓半島、具体的には清川江以南の地域を対象に使用する。

裴眞晟 (Bae jin sung; 大韓民国 国立釜山大学 考古学教授)

引用文献 (カナダラ順)

- 姜振表 2011 「湖南地域青銅器時代墳墓の最近の調査成果」『墓を通してみた青銅器時代社会と文化』第5回韓国青銅器学会学術大会
- 畿湖文化財研究院 2008 『華城桐化里遺跡』
- 金権中 2008 「青銅器時代周溝墓の発生と変遷」『韓国青銅器学報』3 韓国青銅器学会
- 金秉模 1981 「韓国巨石文化の源流に関する研究 (1)」『韓国考古学報』10・11 韓国考古学会
- 金元龍 1974 『韓国の古墳』教養国史叢書2 世宗大王記念事業会
- 金元龍 1986 『韓国考古学概説 (第三版)』一志社
- 金貞姫 1988 「東北アジア支石墓の研究」『崇実史学』第5輯 崇実大学校史学会
- 朴チョンテク 2010 「広州駅洞 e ピョナンセサンアパート新築敷地内遺跡 (カ・マ地点) 文化財発掘調査」『移住の考古学』第34回韓国考古学全国大会 韓国考古学会
- 裴眞晟 2010a 「江界豊龍洞石棺墓に対する断想」『釜山大学校考古学科創設20周年記念論文集』釜山大学校考古学科
- 裴眞晟 2010b 「無文土器の系統と展開」『考古学雑誌』第16輯 韓国考古美術研究所
- 裴眞晟 2011 「墳墓築造社会の開始」『韓国考古学報』80 韓国考古学会
- 安在皓 2009 「松菊里文化成立期の嶺南社会と弥生文化」『弥生文化誕生』弥生時代の考古学2 同成社
- 李栄文 1993 『全南地方支石墓社会の研究』韓国教員大学校博士学位論文
- 李鍾宣 1976 「韓国石棺墓の研究」『韓国考古学報』1 韓国考古学会
- 李鍾洙 2009 『松花江流域初期鉄器文化と夫余の文化起源』周留城
- 金用珩・石光濬 1984 『南京遺跡に対する研究』科学百科辞典出版社
- 都宥浩 1959 「朝鮮巨石文化研究」『文化遺産』2
- 都宥浩 1960 『朝鮮原始考古学』科学院出版社
- 李ギユテ 1983 「白川郡大雅里箱式石棺墓」『考古学資料集』6 社会科学院考古学研究所
- 李ヨンヨル 1959 「鳳山郡御水区石箱墳」『文化遺産』1 科学院出版社
- 石光濬 1973 「北倉遺跡の箱式石棺墓とコインドルについて」『考古民俗論文集』5 社会科学出版社
- 石光濬 1974 「五德里コインドル発掘報告」『考古学資料集』4 社会科学出版社
- 石光濬 1979 「我が国西北地方コインドルに関する研究」『考古民俗論文集』7 科学百科辞典出版社
- 鄭ヨンギル 1983 「新坪郡仙岩里箱式石棺墓」『考古学資料集』6 科学百科辞典出版社
- 鄭チャニョン 1974 「北倉郡大坪里遺跡発掘報告」『考古学資料集』4 社会科学出版社
- 黄基徳 1963 「黄海北道黄州郡沈村里キン洞コインドル」『考古学資料集』3 科学院出版社

(原文: 裴眞晟 2012 「清川江以南地域墳墓の出現について」『嶺南考古学』60号 pp.5-29)